

東郷村報

第193号
昭和42年9月1日
発行所
宮崎県東臼杵郡
東郷村役場



在りし日の若山牧水先生

牧水祭記念号

牧水祭を迎えて

牧水顕彰会長 黒木松美

九月十七日は若山牧水先生の第三十九回忌にあたりますので、本年も「牧水祭」を行ないまして、先生の御遺業を讃えることといたしました。

顧みずと牧水顕彰会を結成いたしましたのは昭和二十六年の九月でありましたので、すでに十六年の年月を経ました。その間牧水顕彰会が夢寐の間にも忘れがたき出来なかつた生家の保存、牧水記念館の建設が完成しましたことは御同慶に堪えません。これ全く村民の皆さまをはじめ県内

牧水の作品

随筆と紀行文

鮎釣に過ぎた夏休み

わたしは日向うまれである。むづかしくいふと宮崎県東臼杵郡東郷村大字坪谷村小字石原一番戸に生まれた。明治十八年八月二十四日のことであつた。父は尾山山北麓に当る。その溪間だ。この溪は山陰村にて耳川に注ぎ、やがて美津津にて海に入る。山陰村より美津津までの溪谷美(といつても立派な河であるが)は素晴らしいものであるが、辺鄙のこととて誰も知るまい。同地方特産の木炭の俵の上に乘せられてこの急瀬相次ぐ耳川を下ることは非常に愉快である。下り終ると美津津の港の河口に日向洋の白波の立っているのがその砂浜の上に見える。小さい時山奥から出て来たのは浪といふものを見た時はほんとに驚喜したものであつた。

塩売りが来る。彼はそれを待ち受けてゐる。やがて自身で料理にかかる。刺身庖丁の使ひぶりは彼の自慢の一つであつた。そして綺麗に料理しあげて、膳をこしらへて、台所の山に面した緑端へそれを持ち出し、サテ、わたしの起きて来るのを待つのである。波々私に起きてゆく。父はちゃんと用意してあつた膳の上から一つひとつとよかるといふ。一ぱい。年令僅に十幾才の癖を相手に彼はいかにも満腹だかを通したものである。その父逝いて十五年、悴もいつか父に劣らぬノミヌケとなり、朝晩、ふらふらしながらかうしてたまにまた通かに故郷のことなど思いだすとおのづから眼瞼の熱くなるのを覚ゆるのである。

たまたまよわが窓のつめたきよ、海はけふげにいくたびか色を変えけむとある雲のかたちを夏のおもひ出ぬ、三月の海の色さびしき紫紺手に触るるわびしき記憶にがき悔、岩をめぐりて浪をむらがる

たらたらと砂ぞくづるるわが踏めば砂を崩るる、藍色の海の低きよ嬉し、嬉し、海が曇る、これからわたしの自体にあぶらが出る

など、この美津津から岩脇あたりの海岸で作つたものであつた。

都農町の姉の家の裏木戸を出ればたひらかな肥えた畑で、其処に立つと真北に尾山山が仰がる。その山の向う麓にわたしの生れた村はあるのである。少年の頃、やゝ久しく此処に客に來てゐたことがあり、毎日の広い畑から尾山山を望むのを喜んだ。春の深い頃でもあつたか、煙たひ煙たひおぼろおぼろに霞みかきえた尾山山の姿がしみじみと思ひ出さる。その心を語らうとして妻をその畑中に誘うたが、伝へかねる気持ちに思はれては啜んだ。丁度母も姉もあつた。丁度母も姉もあつた。丁度母も姉もあつた。丁度母も姉もあつた。

外の方々の御協力の賜でありまして感激の至りでありませぬ。牧水記念館は七月末に完工いたしました。目下内容の整備をいたしてあります。十一月三日の文化の日を以て落成式を兼ね開館式を挙げたいと思つてあります。少くとも牧水研究に志す人々は今後一度は必ずこの坪谷の地を訪れることであらう。

「牧水の研究は坪谷を訪ることによつて初めて出て来る。坪谷を訪れないで牧水を語ることはな

れ」と言われる程に記念館を整備して名実ともに文化の聖地といたしたいと思ひ、まして着々その実現に努力いたしてあります。

本年の「牧水祭」はただ「歌碑祭」のみにとどまらず十一月三日の牧水記念館落成式「開館式」に多様な記念行事を行なうことといたしました。

茲は「牧水祭」を迎え、すにあたり村民の皆さまを初め県内外の方々の牧水記念館建設によせられたい御厚意を謝しますと共に、今後とも御協力下さいませ、よう御願ひ申しまして御挨拶いたします。

九州めぐりの追憶

先に矢岳附近の高山鉄道を説いたが、汽車が日向路に入つて山ノ口、青井岳駅あたりを走る附近がまだ甚だ山深い。此処は高山でなく山中鉄道と呼びた。汽車は多く山腹を走り、周囲に原始林らしい森林を見て過るのである。青井岳駅で降りた熊師らしい二人の男が貂に似た獣を背負ひ、草の笠を冠つてゐた。老若三人の女たちの間にははじとときり野菜の話がはずんだ。

延岡から東、別府までの汽車はわたしには初めての線路であつた。いい景色があると思つてゐたのであつた。眺めたいと思つたが、都農の義兄の家での接待酒が利いて、ともすればうとうとと眠りかけた。然し、冬枯の赤錆びた山肌や、多分親子川であらうと思はる川の瘦せた川原が遙か目下流れてゐたりするのが折々眼に触れて、静かな車中であつた。正午一寸覗いてみると食堂車が空いてゐたので、母、二人の姉、妻を其処に誘つた。丁度汽車は日当りのいい山腹を走つてゐた。枯葉をつけたままの櫛林が明るく車窓に見える。他に客がないので、そ

して汽車の食堂といふものが珍しくもあつたので、年寄りの女たちもお喋りしながら幾らか盆を重ねた。

日記

(明治三十六年)
(延中四年生)

一月一日 晴 暖
明治三十六年の初日、愈々今日より起レリ、何トナク心改メレル如キモ興アリヤ独立新聞來ル、二十四頁ノ大サナリ、見ル可キハナシ、氷花兄ノ歌出デタリ、屋ヨリ稔ヲ供ヒ、後山ニ山芋ヲ掘ル、得ル所三百五十目

◆年たちし十戸の村の曙を村に一つの鐘高うなる遊
◆ただ一人新築意こまを遊びけり人里遠き寺の門松
◆ことほぎのみ旗か、げし大船の帆高く初日さしのぼる

◆日の本平和こゝにたちそめし高千穂峰の春のあけほの
田園のお正月、淋しきかぎりなし

◆百一つ、のひびきの消ぬまを海原とほく初日さし出でぬ

(発信) 小野葉桜、猪狩、山本七郎、坂田弁二
(受信) 河野佐太郎、河野眠花、山本七郎、兒玉徳二郎、高森、大見、小田初、兒玉清一、泉、鈴木、進藤政、四屋恵、甲斐、富田、小戸戸
一月二日 うす曇り 寒 風

◆新年の賀状来る事しきりなり、風荒み、空さへ曇りて予定の山芋ほりも叶はず、八丈伝など見る。碌々として日消す。

◆春江兄より年賀状の末に一首を添へ来る「歌になん読みてや見むと思へなんの清らけき朝日影」

◆春江兄は、頃日、大内の姓をやめて、鈴木とか云う親戚へ養子に行かれたりと、松の香りの朽木の薫り身にしみてうなだれ勝の松小笠よ

(発信) 高森、進藤政、村井、安達、小田初、百、源、兒玉徳、河野新、四、屋、甲斐富、金田進、金、田晴、長田、喜多、古川、正、綾部、氷花

(受信) 霧岳ヨリニツ秋担ヨリニツ、白梅、門馬、楠数馬、金田晴、喜多寿、葉桜、村井、古川正、綾部重、相田、工藤源、田原、春江

一月三日 快晴 暖
相変らず事も無く暮す、快晴にうかれて、獲物多からず

◆野の花の芳香をかきし夕べより日毎にたどる道つづくしき

◆歳かげに磯草あつめ焚火して夫まち居れば月ほのめきぬ

(発信) 柏田、工藤、田原、大村、関兄弟
(受信) 古川清、大村綱三、黒木寿三、関貞三、実の諸君

一月四日 曇 寒
頭すこし重き心地す、天気が故なるべし、矢張事もなく暮す

◆延岡の桂風君より野虹会の兼題を報じ来る
「麦、大根、梅、兔、密柑」の五つ、早速首を傾けたれど、出来たるは少し夕方浮かれ節かたりの酔人寄り来りて、興を醒す、尾鈴の山に雪ふるを見る寒き日なり。

◆駒ながら鳥帽子はねて鶴を見る(仰ぐ)梅の御苑の有明月夜

◆詩筆を焼いて肥料に作りたる李白が麦ははや芽だちたり(五句に春の風吹く)

◆簪たいて太刀と翁骨高し白ひげながし白梅月夜
◆柴を燃る鎌の手とめて仰ぎ見る雲に思の行え知らはずなり

外に新体詩めきたるを作り見る、泣重のゆく春、藤村の一葉舟などを見る

(発信) 田中純一郎、前田露岳、大内春江の諸君
(受信) 桂凡、佐久間、寺沼、田中純

一月五日 快晴 暖
明日出御せむ用意す、夕方、矢野捨吉君帰村セラ、米良地方ニ在リタリと。桂凡へ面白き端書を送る。屋過ぎ、浄瑠璃語り来る。普公を物語る。

◆梅園を東にひろき麦畑のみなもえ出でて春の風ふくのか

(発信) 桂凡
(受信) 桂凡、岡本、金

